

胃切除術を受ける患者の術前食事指導について

中5階：松岡めぐみ・西原三枝子

1. はじめに

胃切除術後の患者は、食事をする時、その失った機能を補うような食事のとり方をする必要がある。患者が、その必要性を理解し受け入れるまでには、ある程度の時間がかかるものと考えられる。そのため、昨年より当病棟では、術前から術後の食事方法について説明を行なうようになっている。しかし、術前に術後の食事について説明することで、患者がさらに不安になるのではないかという疑問もある。そこで、今回、術前から術後の食事方法について説明することは、術後の食事をスムーズに受け入れることにつながるのか、それとも、不安を増すことになっているのかについて検討した。

2. 方法

平成7年1月から10月までに、当病棟で胃切除術を受けた患者16名（全摘術6名、亜全摘術10名）について以下のことについて調べ、分析する。

- 1) 入院中の看護記録を振り返り、術後の食事のとり方、腹部症状出現の有無、食事に関する訴えをとりあげる。
- 2) 電話、また面接による調査を行なう。
 - ①術後の食事について、入院前に知識があったか、無かったか。
 - ②術後の食事について、いつ指導を受けたか。
 - ③術前からの食事指導に対して感じる事、思うこと。
 - ④実際に食事をして感じたこと、思ったこと。

3. 結果および考察

はじめに、入院中の看護記録の振り返りと電話による調査から、それぞれ食事を受けた時期が異なり、術後、食事に対する患者のメッセージが伝わってきた3つの事例を紹介する。

1) 術後食事開始時に食事指導を受けた1事例

看護記録から

食事摂取により、蠕動痛、下痢、倦怠感の出現があった。蠕動痛と下痢に関しては、食事摂取の速さを見直し、さらによく噛むこと、ブスコパンの内服を早めに行なうことを指導した。これにより蠕動痛は徐々に緩和したが、下痢については食べ方の見直しでは効果がみられず、整腸剤、止痢剤の内服で軽減した。食後の倦怠感に関しては、食後すぐに臥床していたところを、30分座位をとることで症状の改善がみられた。食事に対して、「分食していると、いつも食べることばかり考えてしまい、精神的につらい。食べても下痢で栄養にならない気がする。」という声が聞かれた。

退院後のアンケートから

- ・術前から食事の量は少なめで、ゆっくり食べる方だったので術後の分食や、ゆっくり食べる

ことへの抵抗はあまりなかった。しかし自分でも注意して、今までの2～3倍の時間をかけるように心がけていた。

- ・今も時々下痢をするが、自分なりに考え、「家族のペースに合わせてしまう。」「好きなものと速度が速くなる。」「口当たり、のど越しの良いものと嘔む回数が減る。」ということだと分析している。
- ・「手術をすればよくなる。」ということしか考えず、まさか食事でこんなに苦勞するとは考えも及ばなかった。術前とはあまりにも胃腸の調子や、感じが変わってしまった。

2) 術前食事指導を受けた1事例

看護記録から

本人から「食べることが好き。」という言葉が聞かれており、食に対する関心が高い。食事指導をした時にも、積極的に自分の疑問を聞いてきた。

食事は必ず分食し、食事の1～2割を40分ほどかけ摂取する。食事摂取により下痢、吃逆、つかえ感の出現がみられる。1口30回噛んでいたものを、50回噛むことで食事の速度をさらにゆっくりにし、食後座位での休息を促す。このことで、吃逆、つかえ感に関しては改善がみられた。下痢に関しては、整腸剤の内服により効果がみられた。

退院後のアンケートから

- ・食事をとる速さは、自分ではゆっくりな方だと思っていたが、実際に食事をとり始めると、つかえ感と、下痢があった。もっとよく噛んで、できるだけ通りやすい形にして消化不良にならないようにしようという思いがとても強く、さらにゆっくり、よく噛む食べ方をするようになった。
- ・術前に、食事指導を受けていたので、それなりに自分では術後の食事に対するイメージを持っていた。しかし、実際食べてみるとイメージしていたものとの、感覚的なズレを感じた。
- ・流動食が始まったとき、「やっと食事が食べられる。」という気持ちで、「あれも、これも食べたい。」という思いがあった。しかし、現実には、入る量があまりにも少なくながっかりした。

3) 術後食の食べ方に対するイメージが現実的なものとしてできあがっていた1事例

看護記録から

必ず分食をしており、時間をかけゆっくりとかなり慎重に食べている。

「自分は、胃の2/3を切っているのだから少しずつ食べる必要がある。会社の同僚で胃の手術を受けた人がおり、その同僚が分食をしている姿をずっと見てきていた。だから、そういうふうによればいいと思っている。」と、食べ方に対する思いが伝わってきた。

尚、この事例については、現在患者さんが入院中のため退院後の調査はできませんでした。

事例1, 2からは、術後患者は、実際に食事をして初めて健康なときとは違う胃腸の感じを体験し、食事への意識が高まらざるを得なくなる。患者にとって術後の食事とその食べ方は、あくまでも予備知識であり、イメージであることがわかった。

事例3からは、術前から持っていた知識が、術後の食事を受け入れることに対して、良い方向に

はたらいてる。

調査した16名中術前から術後の食事について、「何らかの知識を持っていた。」と答えた人と、「全く何も知らなかった。」と答えた人は、それぞれ8名ずつであった。「何らかの知識を持っていた。」と答えた人では、「胃が小さくなる分、食事を何回にも分けて食べる必要がある。」という内容のことを、入院が決まってから自分の周りの人から何となく聞いたというものであった。「全く何も知らなかった。」と答えた人からは、「入院前は病気のこと、手術のことで頭が一杯で、術後の食事のことまでは考えが及ばなかった。」「胃を切るということはわかっている、切ったからの食事ということには結びついておらず考えもしなかった。」との声が聞かれた。

術前から食事指導を受けた人は10名で、全員が術前に食事指導を受けたことに関して、「抵抗はなかった。」と答えている。また、術後食事開始時に食事指導を受けた人は6名であったが、この6名からも、術前から食事指導を受けることに関して、否定的な意見はほとんど聞かれなかった。

術前から食事指導を受けることに関して思うこととしては、以下のことがあげられた。

良かった点として

- ・早く知ることは手術の心構えの1つになる。
- ・何となくいろいろな人から術後の食事についての情報が入ってくるが、「こうなるらしい。」という憶測のものであるので、詳しく聞く機会があってもいいのではないか。
- ・実際に食べて、何らかの症状を経験し、自分なりの対処方法を見つけていく上で予備知識になる。

悪かった点として

- ・術前から知らなくても、術後食事開始時で間に合う。
- ・あまり詳しいことを聞くと不安になりそう。

このような意見や思いから、術前に説明を行なうことが、患者の不安を増やすことにはつながらないと思われる。しかし、入院前から術後の食事について知っていることがあった人でも、「それ以上知りたい。」という興味はなく、積極的に行なった方がいいという思いはないようであった。患者にとって看護婦の行なった食事指導の印象としては、実際に食事をして何らかの腹部症状が出たときに、アドバイスを受けたことがあげられており、「いつ知ったか。」「いつ知りたかったのか。」ということに関しての印象は、薄いものだったととらえられる。食事は、ひとりひとりの味覚や、食べ方に違いがある。それは長年、その人の習慣として定着しているものであり、その習慣を変えることは容易ではない。しかし、術後、患者は、今までの習慣とは違った食べ方をしなければならない必要が出てくる。そのため、術前から術後の食事について知識を持つことは、入院中だけでなく退院後のことも含めた、食事指導の第一歩だと考える。指導の内容としては、術前は細かい指導の必要はなく、その概要がわかっているだけで良い。そして、さらに症状が出現したその時々適切な指導が求められているものと思われる。

4. おわりに

今回調査した症例数は少なかったが、患者が食事についてどう思い、考えているのか、一部知ることができた。これをもとに、胃切除術を受ける患者の食事指導について、どのようなものがより効果的なものになるのか、さらに検討していきたい。

参考文献

- 1) 山森久恵, 平良美子, 他: 胃全摘術を受けた患者の食事指導, 臨床看護, 13 (8) 1169-1178, 1987.
- 2) 数間恵子, 石黒義彦: 胃がん術後患者の栄養状態回復と, 摂食行動および心理社会的要因との関連に関する研究, その1. 栄養状態回復と摂食行動の関連について, 千葉大学看護学部紀要, 13: 47-54, 1991.
- 3) 数間恵子, 石黒義彦: 胃がん術後患者の栄養状態回復と, 摂食行動および心理社会的要因との関連に関する研究, その2. 栄養状態回復と摂食行動に関連する心理社会的要因について, 千葉大学看護学部紀要, 13: 55-65, 1991.
- 4) 佐々木道江, 杉森さみ子: 胃切除術後患者の術式別食事援助, 看護技術, 38 (3) : 41-44, 1992.
- 5) 目時のり, 菖蒲沢幸子, 他: 胃切除術後の患者指導, 看護技術, 38 (3) : 45-48, 1992.
- 6) 数間恵子, 石黒義彦: 胃がん術後遠隔期患者の「食べ方」に関する看護診断, 日看科会誌, 12 (3) : 142-143, 1992.
- 7) 胃切除患者会健胃会: 胃を切った仲間たち, 第1版, 桐書房, 1990, P90.